5 月 22 日(土) 14:50～15:30（西校舎 517 番教室）

「粉河寺縁起絵巻」にみるジェンダー　― 高野山への対抗的表象としての絵巻 ―

学習院大学　亀井 若菜

「粉河寺縁起絵巻」は、和歌山県粉河寺の縁起を記す 1 巻の絵巻である。平安末期から鎌倉初期頃の制作とされ、２つの話が収められている。第 1 話は、千手観音の造立を願った猟師が、童の助けによって願いをかなえ、近隣の者とともに観音に帰依する話、第 2 話は、河内国の長者の娘の病を粉河の童が治し、粉河に赴いた娘が千手観音の前で出家をする話である。

この絵巻については、これまで主に寺外制作説が出され、後白河院の関与も推定されてきた。しかし本発表では、それらの論拠を検討した上で、以下の理由から、粉河寺が絵巻を制作したと考えたい。

本絵巻に先行する粉河寺の縁起としては、天喜 2 年（1054）に寺僧の仁範が記した「粉河寺大卒都婆建立縁起」がある。絵巻とこの縁起の内容を比較すると、仁範の縁起では、猟師は観音に「唯独帰依」し、観音を造立したあと「永断殺生」となる。しかし絵巻では、観音の前で老若男女が帰依する場面や、猟師が殺生し、妻や子と肉を食する場面が描かれる。また仁範の縁起では、「河内国渋河郡」の佐大夫の「一愛子」が病気になったとされる。子の性別は記されず、その子が出家する話もないが、絵巻では「河内国讃良郡」の長者の「娘」が、一家の者とともに出家をする。また仁範の縁起では、その後「渋田村寡婦」や「名手村女人」が建物を粉河寺に施入した話が記されるが、これらの話は絵巻にはない。

仁範の縁起が改変され、殺生、肉食、女性の信仰といった要素が加えられて絵巻が作られた背景には、粉河寺と高野山の対抗的関係があったのではなかろうか。

粉河寺と高野山は地理的に近く、高野山は 11～12 世紀にかけて荘園制的領域支配を進め、殺生禁断を打ち出しながら、粉河寺領を取り巻くように寺領を拡大した。仁範の縁起にはあった建物施入の話が絵巻で省かれたのは、渋田荘が久安 2 年（1146）に、名手荘が嘉承 2 年（1107）に、高野山領となったためであろう。13 世紀半ばには、粉河寺領と名手荘との間で、領地の境界をめぐり武力衝突にまで発展した堺相論も起きている。「長者」の所在として絵巻に記された「河内国讃良郡」についても、讃良荘の地頭識が寛喜元年（1229）に高野山のものとなっているのである。高野山は 12 世紀頃より女人禁制も敷いている。

絵巻に殺生や肉食、女性の信仰や出家が描かれているのは、中央の男性権力者の崇敬を受けて寺領を拡大し、殺生禁断、女人禁制を敷く高野山に対し、粉河寺が対抗的表象を用いて差別化を図り、在地の信仰と寺領の安定的経営を図ろうとしたためではなかろうか。

絵巻には表されない高野山のイデオロギーを想定することにより、「粉河寺縁起絵巻」の表象が意味を持ってくると考えられるのである。